

# 高等学校の応援団の活動に関する研究

## — 演舞における儀礼的要因の分析に向けて —

金塚 基・岩崎 智史

A Study about Japanese High School Cheering Squad of Activities:

Toward the Analysis of Ritual Factors in the Dance Performance of the Japanese Cheering Squad

Motoi Kanatsuka and Satoshi Iwasaki

### 要旨

応援団の具体的な応援活動において最も特徴的であり、その集団的な応援活動を支える主要素である演舞の儀礼的要因について考察した。そして、モーションキャプチャーを用いて高等学校応援団員による演舞動作の収録、データの解析から演舞の基本動作における首ならびに頭の移動量について、相対的に熟練度の高い3年生の演舞の基本動作において、2年生のそれよりも首や頭のブレが少ないことが明らかになった。本稿で扱った分析データの考察は、一組の応援団員による一つの演舞演目のみからの考察であるが、日常の現実的な身体の動作と異なる舞踊の儀礼的動作の要因が抽出された可能性が高いと考えられる。

### キーワード

応援団、特別活動、演舞、儀礼、モーションキャプチャー

## 1. はじめに

日本の学校では、自校の選手たちを応援する行動をリードあるいは統制する役割を担う応援団と呼ばれる組織が伝統的に存在してきた。彼らは日々の訓練とともに、運動部の大会や対外試合での応援をリード・統制するのみならず、校内における体育祭などの学校行事における集団的な応援活動を統制する役割を担う<sup>1</sup>。

ところで、応援の機能に関する代表的な研究といえる高橋（2011年）では、「儀礼」の観点から応援を考察した諸先行研究を基軸として、集団的な応援活動を論じている。「儀礼」とは、非日常的な形態

を通じて最終的に社会的な変化を達成する過程であり、集団的な応援活動にはエンターテインメントを超えて、一体感の高揚から社会秩序や社会的価値を浸透・再生産させる機能を背後に含んでいることが前提とされている<sup>2</sup>。つまり、日常生活の繰り返しとは異なる文脈のなかで生成された変化は、日常生活において再文脈化され、当該変化はより確固とした変化として定着・達成されるといったメタ機能を有するとされる。

これらのことを学校の生徒集団の応援活動として捉えた場合、それは所属する学校における集団的同一性の維持や確認につながる。生徒たちが共に学校の運動部の試合を観戦して同じ学校に所属する運

動部を応援することは、学校集団との一体感を著しく高め、当該学校の文化的価値や規範などを再生産あるいは創造していくような効果をもつ機会として考えることができる。日常的な学校生活を離れた場所で、活躍する選手の姿と自己を同一化して応援する活動が共通の感情を形成し、同級生との一体感を高め、学校への帰属・愛校心を高めることになる<sup>3</sup>。

つまり、応援団は、各種の学校行事における儀礼的要因が創出されるために不可欠な非日常性を高める役割、いわば日本独自の学校文化を形成するエージェントとして存在してきた側面をもつといえる。そこで本稿では、まず、高等学校教育における応援団の位置づけならびに役割を確認した上で、応援団の具体的な応援活動において最も特徴的であり、その集団的な応援活動を支える主要素である演舞の儀礼的役割について考察する。次に、集団的な応援をリードするにあたり表現される演舞の所作には、舞踊に同様に儀礼的要因が含まれていると仮定した上で、モーションキャプチャーを用いた実際の演舞動作の収録、データの解析ならびに考察から儀礼的動作の要因を抽出・明らかにすることを目的とする。

## 2. 応援団の役割と演舞

### (1) 高等学校と応援団

一般的に現在の高等学校応援団は、①部活動・クラブ活動として、②学校の生徒会における各種委員会活動として、あるいは①②の両面を兼ねた組織として位置づけられている。高等学校学習指導要領においては、①の場合、教育課程上の課程外教育活動として、また、②の場合には特別活動として位置づけられる。しかし、執筆者のヒアリングによれば、①②の両面を兼ねている高等学校のケースが多いといえる。

特別活動には「ホームルーム活動」「生徒会（委員会）活動」「学校行事」があるとされている。例えば、入学式や卒業式（儀式的行事）、運動会・体育祭（健康安全・体育的行事）、文化祭（学芸的行事）は学校行事に含まれる。儀式的行事は非日常的な時間を生徒たちに意識させ、厳粛な気持ちで区切り・

節目を自覚させる契機となり得るものとされている。一方、健康安全・体育的・学芸的行事は、非日常的な時間を通じた祝祭としての意味をもち、開放的な雰囲気の中で主体性を十分に発揮し、生徒たちが行事そのものを充実したものとして経験することにより、日常から脱却する契機を与えるものであるという<sup>4</sup>。

以上から、特別活動における学校行事のねらいには日常的な学校生活から離れた儀礼としての演出に基づいた教育機能を見出すことができる。例えば、運動会・体育祭のような学校行事において応援団は重要な役割を担ってきた。よって、当該応援団が組織上どのように位置づけられていようとも、生徒たちの応援活動を統制する応援団は、結果として委員会としての一定の活動役割を担っており、かつ、それは儀礼的な教育効果の達成に影響を与えるエージェントとしての役割といえる。

### (2) 演舞の特質とその技法

応援活動において具体的な応援の進行をリードする際に用いられる演舞には、戦前の六大学野球応援団の開祖の演舞を原点として、終戦直後から演舞の型が考案されていった。これらは、テクなどと呼ばれ、その技術が競われてきた。リズム、テンポ、エール交歓、応援歌、勝利の拍手、声援などのテクの特徴は、整備され伝統の型として継承されていったのであるが、その代ごとに変質してきた歴史がある。例えば、相撲部出身の団長が相撲の不知火型からつくった「相撲型」（明治大学）や空手部出身の団長がつくった「空手型」（法政大学）、また「歌舞伎型」（東京大学）などそれぞれの学校に型の特徴がみられる<sup>5</sup>。

ところで、舞踊とは古来より祭儀から発生したものであり、異次元の空間を醸し、霊に近づくために演じられたという原点があるとされる。つまり、舞踊をみせる対象が神霊、あるいは神々がのり移った舞踊とされるなど、舞踊における美的価値の基準は、人間の日常生活の空間から離脱することを大きな目的の一つとされるなかで追求されてきたという<sup>6</sup>。

日常生活における人間の現実動作と舞踊の動作との間には、その各特徴として大きな隔たりが存在し、そこに舞踊における審美的な価値基準が置かれてきたといえる。

例えば若松（2000年）によれば、現実動作と舞踊の動作とを分離する観念は難しいとしながらも、いくつかの特徴の比較が指摘されている（表1参照）。そこでは、現実の動作は目的的事であること、その動作に付随する感情を有すること、具体・現実的な意味を有するとしている。一方、舞踊の動作には無用性（無目的性）を有すること、情動反応を基底にもつこと、そして現実世界からの離脱といったミステリアスな性質をもつことが指摘されている。つまり、舞踊の動作として区別される動作には儀礼的効果を有する要因を含んでいると考えられる。

例えば、日本舞踊における具体的な身体の動きとして常に重んじられる基準として、まず姿勢の正しさ（手足・腰・背筋・あご・肩・頭にまで至る）が挙げられる。美しい立ち居振る舞いは、正しい姿勢をくずさずに座り立つことが基本とされている<sup>7</sup>。これらは、単に座り立つ動作以外の動作の場合にも保持することが求められる場合もあるため、相当の修行が欠かせない要因となっているとも考えられる。

また、幸泉（2008年）では舞踊の美意識を構成する概念の水準として、①踊り手の身体的表現によ

る舞踊を通じた表象のレベル、②踊り手の舞踊と観衆との背後にある共感感情・観念・物語の共有状態のレベル、③踊り手による人間存在の解放および悟りの表現、つまり、通常の現実世界を超越して普遍的なものに没入する状態のレベル、が挙げられている。これら3つの構成概念のうち、とくに儀礼的的要因が高いと考えられる概念が③の状態に関する美的基準であろう。しかし、3つの状態の構成概念は分離されるものではなく、すべての舞踊の踊り手の完成度が高められることによって、これら状態における潜在的なレベルも上昇するといわれている。

同様に、応援団の演舞では、応援活動における必勝祈願といった神に対する願かけが、応援団の演舞における神事としての美の希求につながり、今日の演舞の独特なスタイルが形成されてきたと考えられる。それらは、例えば演舞に際しての服装や小道具のみならず、入退場に伴う作法や発声法、姿勢、体の動かし方に至るまで、さまざまな非日常的要因が含まれていることであらわれている。演舞のパフォーマンスに要求される技術には、応援活動をリードするためにより高い水準が求められ、例えば、姿勢の維持、発声、動作のキレ、スピードなど技の美しさ、そして長時間の持続が可能な耐久力などの向上を目指した熟達が求められる。

本稿では、以上のことから応援団の演舞を舞踊一般における儀礼的的要因と共通する要因を有すると仮

表1 現実動作と舞踊の動作の特徴比較

	実質的な目的的动作	動作付随の感情	意味不明な動作はない
現実動作	<ul style="list-style-type: none"> <li>○動作内容の間接性</li> <li>○時間の序列性</li> <li>○効率主義</li> <li>○適合的な空間</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日常的個別の感情・動作に伴う無意識的感情・自然な情動の発露・恣意的感情・感情の節約</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○現実の背景での意味</li> <li>○現実の場所での意味</li> <li>○現実の小道具の意味</li> <li>○現実の人間関係</li> <li>○社会階層に応じた動き</li> </ul>
舞踊動作	<ul style="list-style-type: none"> <li>○動作内容／時間の非序列性</li> <li>○装飾的表現の出現</li> <li>○空間枠組みの破壊</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○情動反応を基底に持つ</li> <li>○構成された感情表現</li> <li>○感情と動作の結合と分離・虚構的・演出的情動</li> <li>○統制的感情</li> <li>○感情を示す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ミステリアスな要素を持つ</li> <li>○虚構の意味の象徴性</li> <li>○虚構の場所の象徴性</li> <li>○造り物の小道具</li> <li>○虚構の人間関係</li> <li>○神を内包する傾向</li> </ul>

引用：若松美黄（2000年）より抜粋

定した上で、それらが具体的にどのような形態として表出されているのか、高等学校応援団員の協力を得て、実際の演舞に関するヒアリングおよびモーションキャプチャーを用いて映像ならびに数値データの収集・分析を試みた。

### 3. 演舞データの収集と分析

#### (1) 調査の概要

##### ・調査の経緯およびヒアリング

今回の調査対象の選定に際する応援団の条件として、伝統的な応援団としての活動（一定の長期間継続する応援団の活動）を有していること、3年生ならびに2年生が団員として存在していることを優先した結果、埼玉県熊谷高等学校応援団員を選定・訪問しデータ収集の協力を依頼した。

応援団の演舞において前提となる審美的基準には、各学校の応援団の伝統やそれぞれの演舞の種目に応じて様々なものがあるという。しかし、基本となる基準として、動きの速さや止めなどの強弱のキレや正しい姿勢の保持といった共通する基準も存在する。つまり、今回の調査対象とした応援団においても日本舞踊と同様な基準が存在しており、演舞の基本動作中においても身体の軸がぶれずに姿勢が保持されていることが演舞の熟達度として強調・評価されている。したがって、本調査においてもそのような基準に着目してモーションキャプチャー映像ならびにデータの整理を行う。

同一演目の演舞の熟練において相対的に長じる3年生の応援団員によるモーションキャプチャーの映像ならびに相対的に熟練度の低下する2年生の団員による演舞のモーションキャプチャーの映像を比較する。

##### ・分析方法

本調査にあたり、データ収集の場として当該高等学校の空調設備のある教室を利用した。ツールであるモーションキャプチャーは「NOITOM PERCEPTION NEURON」（ノイトム社製）ならびに付属分析ソフトを用いた。また、身体各部位に装

着するニューロン・センサーは、頭・首・肩・腕・手・臀部・腿・膝・足の計19個であった。本稿に係る協力者の応援団員は3年生（17歳・団長）および2年生（16歳・団員）である。なお、性別はともに男性で身長は前者が約185センチ、後者が約164センチである。

本稿でデータ分析の対象とする具体的な演舞における動作は、1年次から行う応援団の基本動作である（図1参照）。この基本動作は直立した状態から両腕を斜め45°に伸ばした状態から水平状態に腕を振り、腕を胸元で交叉させた後、前方に両腕を振り下ろす。そして頭の後ろで腕を交叉させた後、両腕を水平に振り下ろすという動作になっている。この際、腕を同じ経路を通して動かすこと、振り下ろした腕が、静止位置できちんと静止することが望ましいことである。また、腕を振り下ろす際、他の身体部位がブレないことが美しい演舞の形であるとのことであった。

#### (2) 分析結果

習熟状況によって身体のブレが異なるかを見るため、2年生（1fps～1506fps）、3年生（1fps～1913fps）の演舞の基本動作実演時の臀部、首、頭の座標位置の計測を行った。初めに、時系列毎のX座標、Y座標の移動量を求め、X座標、Y座標よりベクトル距離を求めた。そして、1/10秒あたりの移動量の総和を見るため、1/10毎にベクトル距離の総和を求め、身体のブレの量を求めた。その結果を図示したものが、図2～図4である。図より、3年生に比べ、2年生は基本動作における時間が早く、移動量が比較的大きいことがわかる。特に移動量に関しては、首や頭においてその傾向が顕著に見られる。また、3年生においても身体の移動が見られるが、2年生に比べその持続時間が短めである。このことから、2年生では身体の移動量、移動時間が長いことが窺える。逆を言えば、3年生は身体のブレが少なく、身体がブレたとしても、短時間でそのブレが収まっているといえる。

最後に、基本動作部分における各測定部位の基本



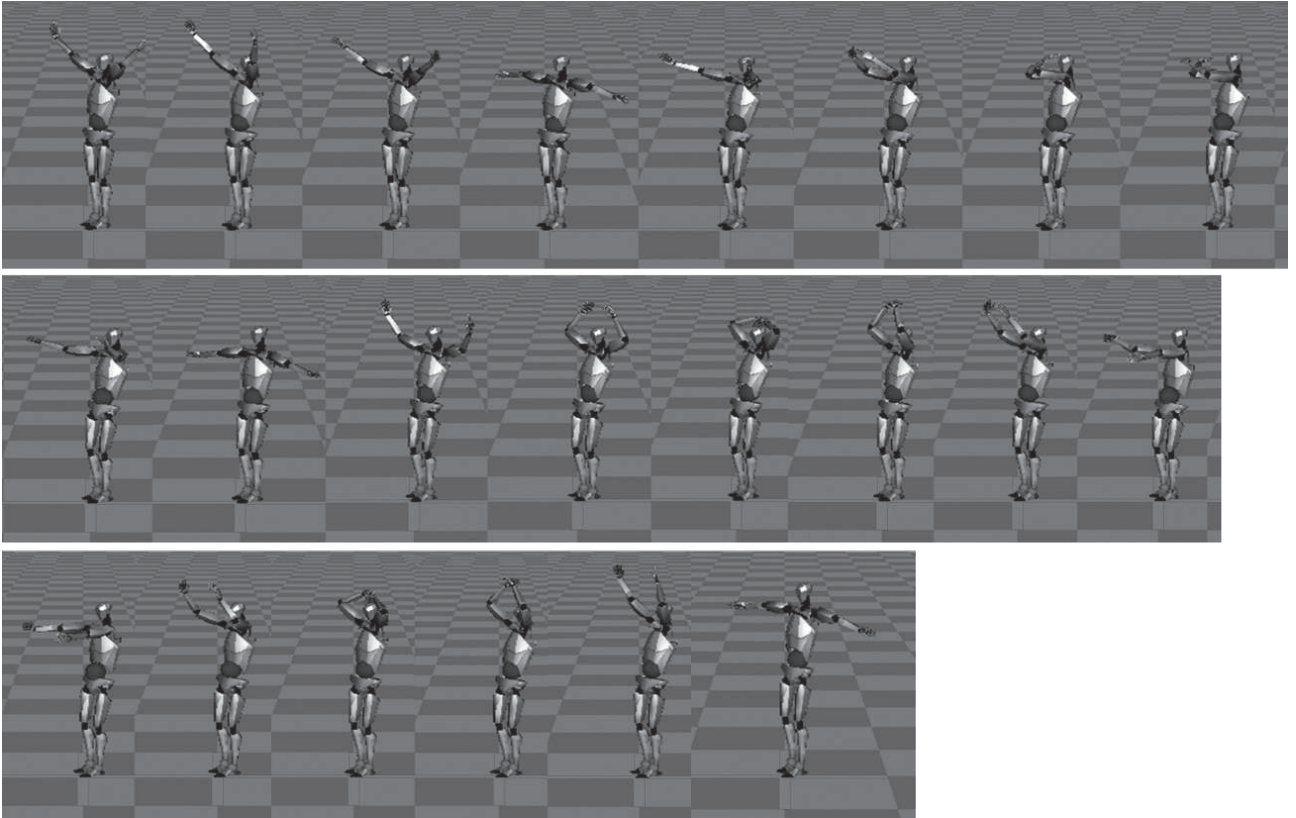


図1 熊谷高校基本動作の図示

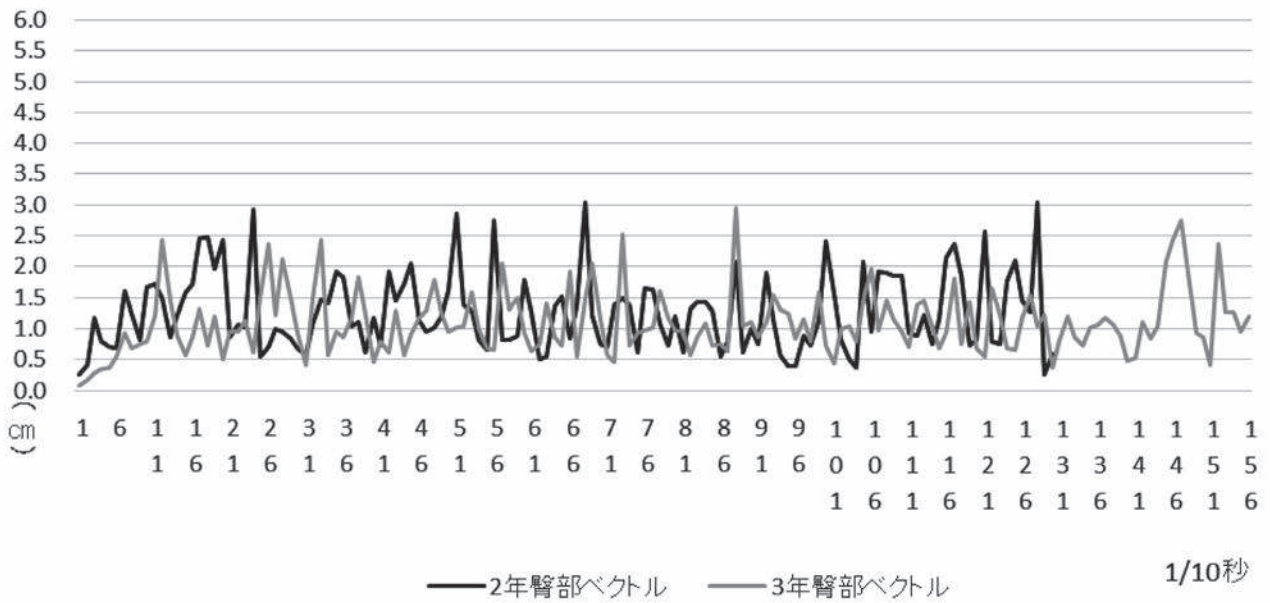


図2 髋部における 1/10 秒当たりの移動量

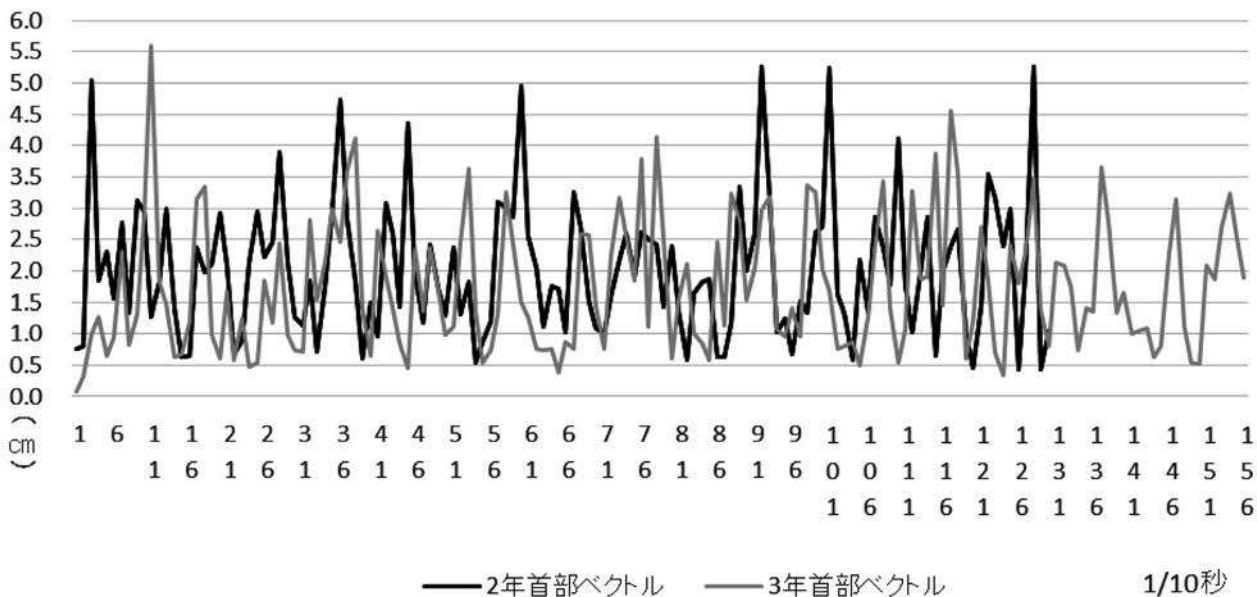


図3 首部における 1/10 秒当たりの移動量

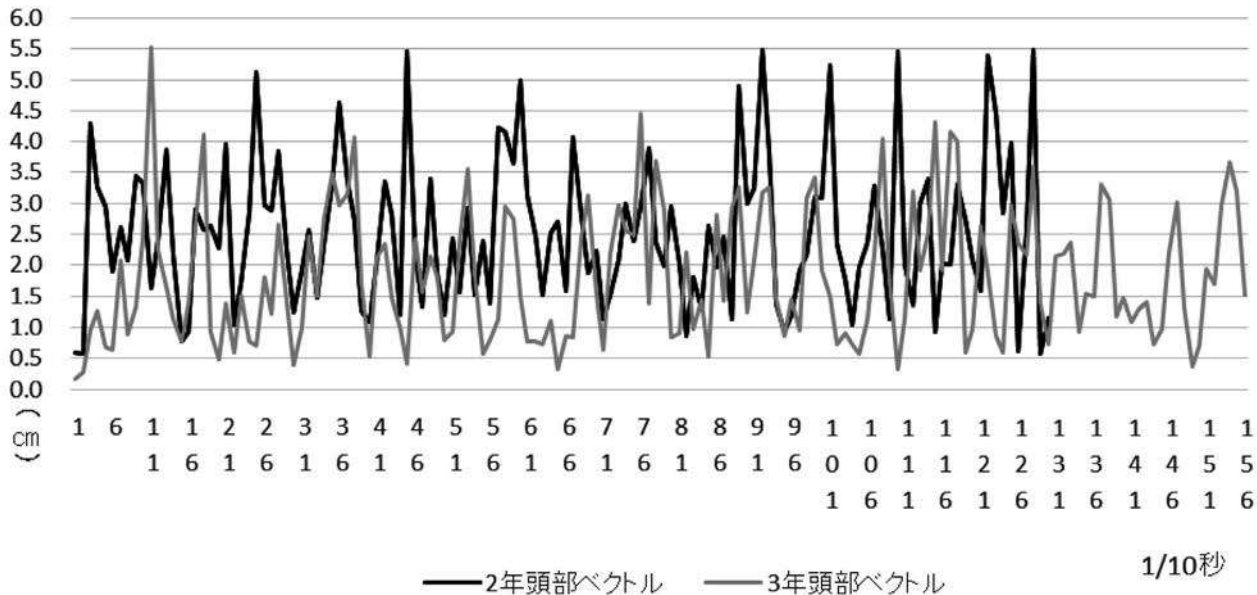


図4 頭部における 1/10 秒当たりの移動量

表 2 基本動作部分における各測定部位の基本統計量

測定部位 学年	臀部		頭部		首部	
	2年	3年	2年	3年	2年	3年
MRAN	1.269	1.097	2.540	1.819	2.023	1.749
SD	0.605	0.520	1.161	1.075	1.049	1.047
MAX	3.038	2.944	5.477	5.518	5.255	5.602
MIN	0.249	0.088	0.566	0.179	0.429	0.070

統計量を示す。最大値を除くいずれの数値においても、3年生の方が2年生に比べ、値が小さいことがわかる。

#### 4. おわりに

本稿は、高等学校教育の応援団を、各学校の集団的な応援活動をとまなう行事において儀礼的要因が創出されるために不可欠な非日常性を高める役割を担うエージェントと位置づけた上で、応援団の具体的な応援活動において最も特徴的であり、その集団的な応援活動を支える主要素である演舞の儀礼的要因について考察した。次に、その演舞の動作のなかにおいて、一般的な舞踊と同様に儀礼的要因が含まれていることを想定しつつ、モーションキャプチャーを用いて高等学校応援団員による具体的な演舞動作の収録を実施し、それらのデータの解析ならびに考察から儀礼的動作の要因を抽出・明らかにすることを目的とした。

今回は、とくに日本舞踊における基本的な審美基準である正しい姿勢の観点に着目し、同様に、応援団の演舞における正しい姿勢の保持に関するキャプチャー・データの分析を試みた。

熟練度の高低における比較手法を用いるため、応援団の2年生と3年生による同一演目を通した平面移動の比較（臀部／首部／頭部）を行った結果、演舞の基本動作（前半部分）における首ならびに頭の移動量について、2年生よりも3年生の方が少ないことが判明した。つまり、ヒアリングでの熟達度の尺度に照らし合わせると、相対的に熟練度の高い

3年生の演舞の基本動作において、首や頭のブレが少ないということになる。そして、このことは日常の現実的な身体の動作と異なる舞踊の儀礼的要因をとまなう動作として捉えることができる。

なお、本稿では応援団の演舞における儀礼的効果を有する可能性のある要因のごく一側面の視点から一組のキャプチャー・データの分析に取り組んだにすぎない。今後の課題として、他の様々な要因ならびに視点（速度・角度・重力）、さらに、複数組における異なるタイプの演目のデータを分析することを通じて本テーマを追求していくことが必要であろう。

#### 注

- 1 Gudrun GRAEWE 「応援団についてーキャンパス・ライブに不可欠の団体か奇妙な遺物かー」『言語文化研究』14(2)、188 / 加賀秀雄・鈴木敏夫「旧制高等学校における応援団の組織化の実相とその歴史的役割について」社団法人日本体育学会『日本体育学会大会号』36、1985年、85
- 2 高橋豪仁『スポーツ応援文化の社会学』世界思想社、2011年、8-10
- 3 丸山富雄「スペクテーター・スポーツの社会的機能に関する考察」体育社会学研究会『スポーツ参与の社会学』道和書院、214-218
- 4 山口満・安井一郎編『改訂新版 特別活動と人間形成』学文社、2010年、213-218
- 5 東京六大学応援団連盟OB会『応援団 六旗の下に：東京六大学応援団連盟36年の歩み』シュ

- バル、1984年、82-92
- 6 森下はるみ「舞踏における動きの美しさ」『バイオメカニズム学会誌』26(3)、2002年、132 / 藤田洋『日本舞踊ハンドブック改訂版』2010年、8-9
- 7 花柳千代『実技日本舞踊の基礎』1980年、26-29、80-81
- 社会文化研究所紀要』10、2008年、118-128
- 高橋豪仁『スポーツ応援文化の社会学』世界思想社、2011年
- 山口満・安井一郎編『改訂新版 特別活動と人間形成』学文社、2010年
- 若松美黄「現実動作と美的動作・舞踊」『舞踊學』2000年、78-79

### 参考文献

幸泉哲紀 “Dance and Aesthetic Ideals : Dance as Form in Motion Representing, Sharing and Transcending the Realities of Human Existence” 『龍谷大学国際

(かなつか もと) 東京未来大学  
モチベーション行動科学部

(いわさき さとし) 東京未来大学  
モチベーション行動科学部